

みんなであ 護る文化財

VOL・4

西巖殿寺は本来一つの寺院ではなく、平安時代から火口の西側に点在していた山上本堂をはじめ37坊ともいわれる寺坊群の総称でした。現在の西巖殿寺は、山上本堂等を移築して成ったものです。

西巖殿寺(さいがんでんじ)

文化財保護委員長

渡邊 昭義

所在 阿蘇市黒川1114番地

宗派 天台宗比叡山延暦寺の末寺

由緒は2説あり、ひとつは、神龜3年(726)、天竺舎衛国の最

栄が阿蘇山上に来て十一面観世音を彫り、仏閣を西の巖殿(今の山上本堂の地)に安置して祀ったという説。もうひとつは、天養元年(1144)、比叡山慈恵大師の徒最栄が、阿蘇大宮司に請い阿蘇山上で十一

面観世音を彫り、火口の西の巖殿で法華経を唱えていたので最栄法師と呼ばれ、その寺を西巖殿寺と呼んだという説です。

その後、僧房はその数を増やし繁栄を極め、衆徒20坊、行者17坊それに51庵の合計88の寺庵が、古坊中に西国の一大宗都を造っていました。ところが、天正年間(1573~1592)の太田・島津の兵乱により、寺僧共々四散し荒果て草原の中に寺院の礎石と基塔のみを残す有様となり、衰退してしまいました。

慶長4年(1599)、肥後の国主となつた加藤清正は西巖殿寺の復興を志し、散住した僧徒を集めて寺領を与え再興しました。また、細川氏も同様に寺領を安堵しました。再興には、長善坊契雅法師の努力が多であったと伝えられています。しかし、明治元年の神仏分離令により寺領安堵の保護もなくなり、永年の宗都も昔日の面影を失ってしまいました。明治4年に阿蘇山上の本堂を現在地(麓坊中)に移築して麓本堂とし、明治23年には山上本堂を再建しました。

残念なことに、平成13年の不審火により、麓本堂は貴重な文化財と共に焼失してしまいました。現在も国指定2件、県指定3件、市指定8件の文化財を所蔵する歴史と文化あふれる寺院です。



麓坊中の繁栄を描いた絵図
江戸時代末期の作品 西巖殿寺所蔵



長善坊の大イチョウ
(樹齢400年・南黒川)
長善坊の跡地に残るイチョウ。西巖殿寺の復興につとめた加藤清正がお手植えされたという説もある。



当時の面影みせる
「行者通り・仲小路通り」
今なお「坊」や「庵」の跡が点在している坊中地区周辺。萬福院跡(乙護法像・佐藤正剛氏宅)、妙園坊跡(十一面観音・宮岡武治氏宅)、幸寶坊跡(地藏菩薩立像・古嶋正晴氏宅)などがある。



焼失前の西巖殿寺「麓本堂」